

泉景。別號爲絢居士。姓佐々木氏。其先出於備中守源頼綱。世居近江。十世之孫左衛門尉諱滿政。移居前越角鹿。至治郎左衛門諱某。移加賀大聖寺。以角鹿爲氏。此爲君五世之祖。考治右衛門諱民安。妣森江氏。君生於安永二年癸巳。小字熊次郎。年甫五歲。以善繪事聞。加侯泰雲公。徵其畫。尋召觀其揮洒。大褒賞有賜。以勉勵之。壽光夫人亦召見有賞賜。及長遊京。從鶴澤探索法眼受狩野氏法。甚有聲譽。享和元年隨師畫內廷之障。因授法橋位。於是復姓佐々木氏。往返金澤有年。終住金澤賜日俸。太梁公金龍公相繼命圖寫。文政四年入京叙爵法眼位。天保十三年命格。弘化四年定奉祿。爲醫員格。於國典爲異數云。嘉永紀元戊申秋九月初病卒。年七十又六。家傳に云ふ。泉景の祖父治兵衛は狩野伯圓の門に入つて畫を學び長生するに依つて、泉景幼少の頃より畫を學ばせけるに、祖父の性を繼ぎて幼少より畫を好み、遂に一家をなすといへり。其の畫圖今金澤等に多く所藏する中にも、野町神明今の泉野神社に鏡山の圖を繪ける大額あり。是泉景の圖する處にして、世人のよく知る掛額なり。此の外神社佛閣に寄附せし掛額等甚だ多しといへり。

○歸山助右衛門舊邸

延寶の金澤圖を見るに、小姓町・中町の北側中村新丞の向を歸山助右衛門居宅の由記載す。元祿六年の士帳に小姓町歸山助右衛門と見ゆ。享保九年の士帳に、小將町歸山長太夫とあり。長太夫は助右衛門の孫にて、後に太次兵衛と改稱す。享保十六年太次兵衛の由緒帳に云ふ。曾祖母者小泉勘右衛門の娘に而、名をくすと申候。歸山忠兵衛に嫁し、助右衛門出生す。助右衛門幼少の時分、様子有之江戸へ出、嚴有公御吳服衆に被召出相勤。其後大奥年寄女中に被命、十九ヶ年相勤罷在處、子細有之助右衛門より御暇爲願ける處、御懇之上意有之、助右衛門加州に而之家祿高上聞に達し、品々拜領物被仰付、御暇被下、助右衛門同道罷歸、貞享三年三月十日百四歳に而歿す。助右衛門は寛永十一年父忠兵衛爲跡目遺知五百石拜領、寛文元年越中境關所奉行被命、元祿十一年二月十日九十五歳に而歿す。助右衛門妻は稻葉宇右衛門之娘、寛永十三年縁組し、寶永五年十月十五日百三歳にて歿す。稻葉宇右衛門は稻葉左近之弟也。寛永十七年に兄弟共切腹被命に付、助右衛門も彈之續柄故に切腹

被命等之處、助右衛門母くす嚴有公へ其旨上聞に達し、赦免有之度旨及歎願處、宥免之儀常卿へ被仰進、助右衛門切腹不被命、無異に而相勤と云々。按ずるに、母子等三人共長壽を保ち、殊に百餘歳まで兩人長生す。大藩なりといへども、國初以來如此人外にあるを聞かず。實に奇人と云ふべし。

○澤橋兵太夫舊邸

有澤永貞の古兵談殘囊集に、澤橋兵太夫は二代兵太夫亂心し跡斷絶す。居屋敷は松平伴七郎之屋敷也。伴七郎も跡絶えたる同事にて、今は他人の屋敷と成りたりといへり。按ずるに、異本微妙公夜話録に、澤橋兵太夫が屋敷は今之松原善右衛門居屋敷也と見ゆ。元祿六年の士帳に、松原善右衛門小姓町とあり。享保九年の士帳にも同様記載す。然れば享保九年の頃まで松原氏彼の舊邸に居たりしと聞ゆ。延寶の金澤圖を見るに、松原源右衛門とありて、勝尾半左衛門居邸の向なり。

○澤橋兵太夫傳

關屋政春の古兵談に云ふ。宇喜多中納言秀家は、慶長五年

關原合戰の時、石田三成と一味に依つて八丈嶋へ遠流也。此の時秀家父子三人配所へ被遣。家禮の儀は本身は遺す事はならず、小身者は誰にても可被遣と被仰出たり。于時常々念頭に被召仕取立てられし小身者は、常々御恩もなければ可參と云ふものなし。大藩の家中より僅十八人御供可仕と書付上る。何も二百石・三百石取の者共也。常々御恩を蒙る事なけれ共、御譜代の主君見捨難し、何處までも付隨ひ御奉公可仕と申上る。此者共唯今切腹する事は最も易し、妻子に今生の別れをして參る事は切腹よりも迷惑なれども、御主人は見捨がたしと申たるよし、彼家の老人芳賀宗恵といふ者常に語れり。扱八丈嶋へは子息二人、澤橋兵太夫の母、是は二番目の子息の乳人也、其の外彼の侍十八人、都合廿二人八丈嶋へ渡りけりと。有澤武貞の古兵談殘囊集に云ふ。澤橋兵太夫入道常珍が事、有澤又助俊參自筆の覺書の趣には、浮田中納言秀家卿は秀吉公の掎君なり。加賀大納言利家卿の娘を秀吉公養子とし給ひ、秀家卿へ嫁せられたり。秀家卿は備前・播磨・美作の三ヶ國を領し、諸大名の崇敬尤いみじかりけるに、秀吉公薨去の後慶